大谷暢裕新門首に聞く

本年6月30日をもって、真宗大谷派第25代大谷暢顯門首が退任され、7月1日には、大谷暢裕門首後継者が第26代門首に就任されます。今月号では、新たに就任する大谷暢裕新門首に、就任にあたってのお気持ちを伺いました。

聞き手：但馬弘宗務総長
2020年5月収録

Profile 大谷 暢裕

1951年8月17日生まれ。第24代門首大谷光暢氏の弟である大谷暢慶氏の長男で、大谷暢顯第25代門首のいとこ。1952年、父・暢慶氏の南米開教区開教使発令に伴いブラジルへ渡る。サンパウロ大学（専攻：物理学）を卒業後、航空技術研究所に勤務。2011年11月、真宗大谷派の鍵役・開教司教に就任。2014年4月、門首後継者に選定され、2015年より日本に暮らす。2020年7月1日に真宗大谷派第26代門首に就任。門首就任にあたり、法名を釋修如に改める。

大切にしている三つのこと

――就任を前に、今、どのようなお気持ちか、率直な思いをお聞かせください。

今思うのは、初めに、鍵役、開教司教のお話をいただいたのが、もう10年近く前になるでしょうか。何よりその時のことがまず思い出されます。

私は幼い頃から、ブラジルで育ちました。ブラジルでは、父が開教に従事するお寺で暮らしていましたが、私自身は、寺とは全然違う分野の仕事をしていたこともありますので、お話をいただいた当時の気持ちとしては、「これは大変なことだ」と同時に、「これは私の一生の中で一番大切なことかもしれない」と思い、鍵役、開教司教のお役をお引き受けすることにしました。

以来、2014年には門首後継者に選定いただき、その思いはますます重みを増しています。

この、大変であり、また大切なことをお引き受けしていくうえで、私は大切にさせていただいている三つのことがあります。

まず一つは、門首の立場というのは、ご門徒さん方、僧伽の皆さんと共に聞法していく立場であるということ。真宗本廟のお給仕を代表してさせていただくという大切なお仕事はもちろんですが、何も特別なことをするのではなく、まずもって、皆さんと一緒に聞法していくことが大事だということを思っています。

二つ目は、大谷派には「宗憲」が定められているということです。その「宗憲」には、目指すべき宗門のすがたがはっきりと示されている。これも私にとって、とても大事なことです。

そして三つ目が、開教司教と鍵役のお話をいただいた際、何もわからないブラジル育ちの私が、不安な思いの中にあった時、皆さんが、「大谷派を挙げて全力でお支えする」と言ってくださり引き受ける決心がつきました。この言葉があったからこそ、私は今日までなんとか歩んでくることができましたし、これからの歩みを進めるうえで大切に胸に抱き留めていたいと思っています。

門首就任については、今は、とても光栄なことであり、私の一生の中で本当に大切な出来事だといただいております。親鸞聖人の教えをとおして、阿弥陀さまのもと、このような素晴らしいご縁に出遇えたことは、本当に感謝・感動、心がいっぱいです。

南無阿弥陀仏に始まり南無阿弥陀仏に終わる

――ブラジルでも真宗の教えには親しまれていたと伺っています。その中では、お父さまである大谷暢慶さまの影響も大きかったとおっしゃっておられましたね。

生まれたのは日本ですが、私が1歳の時に父が南米開教区の開教使としてブラジルに渡りましたので、物心がついた時には、ブラジル文化・ブラジル社会の真っただ中でした。幼い頃は、アサイという田舎町にあるお寺で育ち、父や母に教わったことは「仏教とは南無阿弥陀仏で始まって、南無阿弥陀仏で終わるんだ」ということでした。

中学生ぐらいまでその田舎のお寺で過ごし、その後、ブラジル別院にお世話になりました。別院には、青年会があって、そこで、同世代の人たちとコーラスをしたり、別院の先生方（その中に父もいましたから、浄土真宗について、お話を聞いたり、質問したりする場がありました。

いろいろなことを聞きましたが、一番多く話したのは、「浄土真宗とはどういう教えか」ということです。というのは、やはりブラジルの社会では、仏教というとお釈迦さま、日本仏教となると、やはり禅やメディテーション（瞑想）のイメージが強かったのです。そういう社会の中で、「浄土真宗とはどういう教えか」という質問が、私たち10代の高校生たちの中でよく出てくる話題でした。

幼少の頃に育ったブラジル・アサイのお寺の設立70周年法要に参拝（2018年）。

そこで教わったのは、一つは、浄土真宗は、「皆、そのままでたすかる道があるのだよ」と、その道は「南無阿弥陀仏」だということ。そんな話を聞いて、ものすごく深く印象に残ったことを覚えています。

二つ目は「何事もご縁」ということです。私がここにいるのも、皆さんがこうやって集うのも、何もかも、これは仏さまからのはたらき、ご縁なんだよ、ということです。それは私にとっては何だか不思議な感覚で、ああ、そういうものが本当にあるのか、と受け止めていました。

余談ですが、「ご縁」ということで言うと、別院のコーラスのメンバーに、後に妻となる女性もいまして、そのご縁で彼女と一緒になることになり、今の家族ができるに至ったわけです。

それからもう一つ、仏教、浄土真宗という教えはとてもおおらかで、大きいなと感じたことです。「生きとし生けるものと共に」という教えが、私は、とても素晴らしいことだと受け止めました。

まだ若い、10代の時にブラジルの別院で、父や多くの開教使・ご門徒からそのような話を聞き、心の底に残っていることが、私の中で大切な種となって今の私があるのだと思います。

世界中に南無阿弥陀仏を届ける

――浄土真宗に縁をいただいている私どもは、さまざまな苦悩、不安が渦巻く現代社会に対して、どのようなはたらきかけが大切だとお感じでしょうか。

グローバル化が急速に進む中で、いい面としては、たとえば医療をはじめとする科学技術などは、競い合うようにどんどん発展し、そのおかげで私たち人間は長生きできるようになりました。しかし一方で、貧困や差別、あるいは経済格差や孤独感など、豊かになっているように見える現代社会の陰で、取り残される人たちの存在を感じざるを得ません。そういう世界の動きに対して、浄土真宗の説く「共なる世界」を、私たちはなんとか世界中に広めていかなければならないと感じています。

真宗の素晴らしい教えは、「私をたすけてください」だけではなく、生きとし生けるもの、すべて平等にたすけてもらわなければ私もたすからない。みんながたすからなければ、絶対に一人ではたすからないんだということだと思います。そういうことに目が覚めれば、また違う社会が生まれ、素晴らしい世の中になっていくのではないかと思います。本当に大変なことですが、どんどん進んでいく新しいテクノロジーも活用しながら、世界中に「南無阿弥陀仏」を届ける。そういうことを一所懸命、工夫しながらつくっていかなければならない。それが私たち浄土真宗にご縁をいただいた者の大切なお仕事だと思っています。

人との出会いを大切に

――今後、教区、別院等での法要にも、これまで以上に出向いていただくことになりますが、いかがでしょうか。

実を申しますと、私は父と似ていまして、出歩くのが好きなんです。特に、たくさんの人と出会うということは、私のいただいているお役目の一つとしてとても大事なことだと思っております。ですから、国内や海外の別院、お寺のさまざまな法要・行事にご一緒させていただくことは、大変うれしくいただいております。

そういう機会があるたびに、本当にたくさんの皆さんが集まって親鸞聖人の教えを心から喜んで聞いておられるんだなと、とてもうれしく感じます。これからも、そのような出会いを楽しみにしております。

趣味は書道と料理

――せっかくの機会ですので、プライベートのことも少しお聞かせください。日本で生活されるようになって、何か新しいご趣味などができましたでしょうか。

最近は、特に毎日のように「書道」をやっています。

おかげさまで、いい先生にお会いできて、これまで筆も持ったことのなかった私が、なんとか間に合うような字が書けるようになったかなと。

もう一つは、今は特にコロナウイルスの影響で、外出を自粛しているおかげで、料理をよくしています。

――料理はブラジルの料理が多いですか。

やっぱりそうなってしまいますね。たまに、お煮しめみたいなものも作りますが、どちらかというとブラジルの肉料理が多いです。よく作るのはフェジョアーダという煮込み料理ですね。

書道の稽古をしている様子

暢顯門首の後ろ姿を目標として

――最後になりますが、退任される暢顯門首への思い、そして、門首を受け継ぐことへの思いをお聞かせください。

先ほど申しましたように、大谷派全体の皆さんの後押しのおかげで、今の私がここにいるのだと、皆さんに感謝申し上げます。その中でも、私の門首就任に対して一番大切な経験は、暢顯門首の後ろ姿を毎朝、晨朝法要の時に拝見させていただいたことにあります。暢顯門首はお耳がご不自由なこともあり、口にはあまり、いろいろなことは話されないお方です。ですから、その後ろ姿というものはなお一層光り輝くものだと感じていました。

私にとって暢顯門首はとても大切な方です。その後ろ姿を私の一生の目標として、これからも歩んでいくことになると思っています。

門首就任後は、まずもって2023年の慶讃法要厳修に向けて、力を尽くしていかなければいけないと思っています。おぼつかない私ですが、精一杯務めさせていただきたいと思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

（了）

ブラジル別院報恩講での帰敬式